

平成26－27年度（2014-2015）報告書

平成26－27年度は瀬戸内国際芸術祭の開催に合わせて、イベントによる観光開発というテーマについて考察した。主に島民と共に考える立場をとった。瀬戸内国際芸術祭は、自分たちの生活環境が認められるといううれしさを感じるポジティブな感想とともに、自身が観光の対象者とされる不都合や、生活の足である船の定員超過の問題、また多くのごみの問題などネガティブな感想もある。成果は論文集「瀬戸内海観光と国際芸術祭」（美巧社）としてまとめた。瀬戸内海の景観を活かすことが島嶼観光の前提であるが、さらに地域住民の参加意識の高揚も必要な要件である。産業発展により島の発展を図るモデルを香川県伊吹島の共同調査で考察した。伊吹島はイリコ製造という他の瀬戸内海の島にはない産業を開発した島である。その島においても、原料のカタクチイワシの好漁不漁の波や、船の燃料の高騰により単一産業による島の経済は、翻弄され人口減少が起きている。イリコの消費習慣がない関東地方などをターゲットにする販路拡大などの準備を進めている状況が問題が多い。伊吹島の観光の可能性」（香川大学経済論叢）を作成した。瀬戸内海島嶼に人々に興味を持ってもらうために、瀬戸内海各地の魅力を学生の視線から発信した書籍「島へ行こうよ」（美巧社）「島へ行こうよⅡ」（美巧社）を出版し、希望者や観光案内所などで配布した。更に、四国の特色ある観光の四国遍路に関する著作を瀬戸内圏研究センターから発刊したほか、瀬戸内圏研究センター学術講演会等を通じて、研究成果を発信している。